

美術館・博物館はどこにある？

—芸術鑑賞機会の地域（格）差の分析に向けて—

福井 一喜

I 序論

1. 美術館・博物館をめぐるジレンマ

美術館・博物館は、日本のどこに、いくつあるのだろうか。どこにでもあるのだろうか、それとも特定の地域に集まっているのだろうか。この問題は、美術館・博物館をめぐる議論で不思議と等閑視されてきた。

美術館・博物館は、これまで数多に議論の対象とされてきた。その主要な考え方をあえて一括すれば、美術館・博物館でいかなる運営や展示が行われるか、そしてそこにいかなる芸術的な意義や地域的な意義があるのかということである。こうした議論はいわば、「ある地域に立地している美術館・博物館での展示のあり方や意義」を論じるものであり、「立地」は所与の条件にされてきた。

しかしながら反対に、全国の美術館・博物館の「立地」のメカニズムを知ることができれば、「芸術鑑賞機会の地域差」という、これまで発見されていなかった、新しい視点を得ることができるのではないだろうか。そして、「立地」や「地域差」の分析は、地理学が特に得意とする領域である。

美術館・博物館の立地に特に着目した研究例はいくつか例示できる¹⁾。しかしそれらは立地を、個々の美術館・博物館を単位に分析したケーススタディであって、全国の美術館・博物館の立地を知ることができない。それを知るには、分析対象とする日本の「美術館・博物館」を定義する必要がある。

1) 一例として、以下の諸論考が挙げられる。①松永直幸（2003）ミュージアムの立地に関する考察。文化経済学，3，53-61。②加藤修子（2008）博物館のサウンドスケープ・デザイン—博物館の立地環境と展示の音活用の関係。駿河台大学文化情報学研究所所報，8，153-159。③山田晴通（2013）立地からみた日本のポピュラー音楽系博物館等展示施設の諸類型。東京経済大学人文自然科学論集，134，3-23。

しかしながら、それは難しい作業である。そしてそれが、美術館・博物館の立地が等閑視され、ケーススタディに留まらざるを得なかった理由でもある。なぜなら、美術館 (art museum) が博物館 (museum) に含まれる概念であるように²⁾、「博物館」は、植物園や水族館、動物園といった、通念上は「博物館」とはみなされにくい施設すらも含む、大きな概念である。その概念関係のなかで美術館と博物館を区別することは、美術や芸術とそうでないものとの区別を意味する³⁾。つまり、分析対象として「美術館・博物館なるもの」を定義づけると、それは「芸術とは何か」という、実質的に解の導出が不可能な問題に結びついてしまう。このジレンマを回避しなければ、全国の美術館・博物館の立地を統合的に分析することができない。

2. 観光対象としての美術館・博物館

上記のような文脈とは別に、美術館・博物館とは何かという問題は、博物館法において整理されている。同法において博物館は美術館を含むものとされ、その目的は以下の諸要素から構成される。①歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集、保管、育成し、展示すること、②それらを教育的配慮のもとに一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資する事業を行うこと、③資料に関する調査研究をすること⁴⁾である。つまり法的には芸術性の有無に関わらず、美術館・博物館は教育と研究の場であると同時に、レクリエーションの場としても位置づけられている。

現実的に考えても、美術館・博物館はレクリエーションの場としての側面をもっている。たとえば観光庁は博物館をめぐる観光状況の調査を重ねている⁵⁾、日本交通公社も美術館・博物館を観光資源として位置づけ⁶⁾、日本政府観光局JNTO (国際観光振興機構) は自身の英語版サイトで、MuseumをAttractionsの一つとして特集している⁷⁾。また著名な美術館・博物館は、民間企業のいわゆる「観光スポットランキング」の上位

2) さらに、「美術館」がみな「art museum」であるとも限らない。たとえば国立新美術館の英語名称は「The National Art Center, Tokyo」である。これは自ら所蔵品を持たないことによる。

3) 例えば「博物館」という名称の施設に一般に収められうるような出土品や骨董、古文書などは、ある面からすれば「歴史的資料」であり、別の面からすれば「芸術作品」としてもみられる。ある展示物が芸術であるか否かは、その所蔵施設の名称から単純に決められるものではない。

4) 博物館法第2条による。

5) 「博物館等の文化施設における外国人旅行者の受入に関する調査業務報告書」など。

6) 「MICEの誘致拡大に向けたユニークベニュー利用促進事業」など。

7) <https://www.japan.travel/en/things-to-do/attraction/museum/> (最終閲覧日2018年11月27日)

にある⁸⁾。美術館・博物館は、その芸術性の如何に関わらず、観光対象とみることもできる。

それをふまえて、筆者は美術館・博物館を観光対象として柔軟にとらえることで、美術館・博物館の定義が実質的に不可能であることによって統合的な立地分析が困難であったという問題を回避する。そして大都市圏と地方圏、および都道府県別といった空間スケールにおける、美術館・博物館の立地分布を検討する。これらの方法によって、美術館・博物館の全国的な立地分布の基本的動向を明らかにすることが本稿の目的である。

本稿で主に扱う資料は、文部科学省の社会教育調査である。同調査では博物館を「総合博物館」「科学博物館」「歴史博物館」「美術博物館」「野外博物館」「動物園」「植物園」「動植物園」「水族館」に分類している。本稿ではこのうち通念上「美術館・博物館」とはみなされにくい「動物園」「植物園」「動植物園」「水族館」を除いたものを、「美術館・博物館」として分析していく。なお「美術館・博物館」という記述方法には、ここまで記した本研究の方法論上、美術館と博物館を峻別する意図も、同一視する意図もない。

II 三大都市圏と地方圏における美術館・博物館

美術館・博物館が多いのは、地方圏と大都市圏のどちらであろうか。表1から2015年時点の館数構成をみると、地方圏が65.8%で、三大都市圏の34.2%を31.6ポイント上回っている。100万人あたり館数でも、地方圏が13.5、三大都市圏は6.5である。つまり美術館・博物館は三大都市圏よりも地方圏に多い。

1955年と2015年を比べると、1955年の館数構成は、地方圏が56.1%、三大都市圏が

表1 美術館・博物館数の変化（1955年・2015年）

| | 人口比率 | | 館数比率 | | 100万人あたり館数 | |
|-------|--------|--------|--------|--------|------------|-------|
| | 1955年 | 2015年 | 1955年 | 2015年 | 1955年 | 2015年 |
| 全国 | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 2.7 | 9.9 |
| 地方圏 | 62.5% | 48.2% | 56.1% | 65.8% | 2.4 | 13.5 |
| 三大都市圏 | 37.5% | 51.8% | 43.9% | 34.2% | 3.2 | 6.5 |
| 東京圏 | 17.4% | 28.4% | 21.3% | 17.3% | 3.3 | 6.0 |
| 名古屋圏 | 7.7% | 8.9% | 5.4% | 6.0% | 1.9 | 6.6 |
| 大阪圏 | 12.3% | 14.4% | 17.2% | 11.0% | 3.7 | 7.5 |

注：社会教育調査および国勢調査により作成。

8) 例えば https://www.jalan.net/kankou/pro_003/（最終閲覧日2018年11月27日）など。

43.9%で、その差は2015年のおよそ半分の12.2ポイントに留まる。人口比率に対する館数比率の変化をみると、地方圏では、1955年の人口比率62.5%に対して館数比率は56.1%と下回っており、三大都市圏では人口比率37.5%を館数比率が43.9%と上回る。つまり当時の地方圏では人口に比して博物館・博物館が少なく、三大都市圏では逆に人口に比して多かった。

しかし2015年になると地方圏では、館数比率は65.8%に増加した一方で、人口比率が48.2%に減少した。これに対して三大都市圏は人口比率は51.8%に増加し、館数比率は34.2%に減少した。すなわち1955年とは逆に、地方圏では人口に比して美術館・博物館が多くなり、三大都市圏ではそれが少なくなった。

100万人あたり館数も同様の傾向である、1955年には地方圏と三大都市圏がそれぞれ2.4、3.2であった。これが2015年には、地方圏は13.5と1955年の5.6倍であるのに対し、三大都市圏は2.0倍の6.5に留まる。

つまり美術館・博物館は1955年の時点から地方圏に多く存在したが、その数は人口に比して少なかった。しかし2015年になると地方圏では人口比率以上に美術館・博物館が多く見られるようになるという、逆転現象が起きている。

三大都市圏の内部に目を向ける。2015年の100万人あたり館数はいずれも6.0から7.5と同水準であるが、最も低いのが東京圏である。他方、名古屋圏と大阪圏で、結果的に100万人あたり館数は高くなっている。1955年からの60年間に人口の伸びが小さかった名古屋圏と大阪圏に対し、東京圏では人口増加に館数が追いついていないことが示される。

こうした美術館・博物館数の変化はいつ起きたものなのだろうか。三大都市圏では1970年代と80年代に年10%よりも高い水準で増加した一方、地方圏では同水準の増加率が、1960年代から90年代にかけて長期的に見られる(表2)。とりわけ地方圏の増加率は、1960年代の15.2%、80年代の18.1%が突出している。さらに年次別の増減率を、年代別の日本の平均経済成長率とあわせて考えると(図1)、日本全体では、美術館・博物館は1980年前後を例外として、60年代をピークとした経済成長率の低下に伴って増加率も減少してきたといえる。地域別には、地方圏では1960年代に高度経済成長を反映するかたちで館数が急増し、70年代末から80年代にかけては地方圏でも三大都市圏でも急増傾向である。ただし増減率は年次によって上下し、地方圏ではそれが顕著である。三大都市圏では1978年をピークに減少傾向で、2015年には-4.4%と唯一のマイナスを示した。

このように美術館・博物館は、地方圏では高度経済成長期と1980年代前半に顕著に増加し、その後も緩やかに増加を続けている。そして三大都市圏では1980年前後に急増し、近年はむしろ減少傾向を示しつつある。

表2 美術館・博物館数の年代別変化

| | 平均増減率 | | | 館数構成 | |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 全体 | 地方圏 | 三大都市圏 | 地方圏 | 三大都市圏 |
| 1960年代 | 12.3% | 15.2% | 8.5% | 58.3% | 41.7% |
| 1970年代 | 11.5% | 11.6% | 11.5% | 61.0% | 39.0% |
| 1980年代 | 16.7% | 18.1% | 14.6% | 62.5% | 37.5% |
| 1990年代 | 9.2% | 10.0% | 7.7% | 63.5% | 36.5% |
| 2000年代 | 6.1% | 5.7% | 6.9% | 64.1% | 35.9% |
| 2010年代 | 0.3% | 1.7% | -2.1% | 65.1% | 34.9% |

注：社会教育調査および国勢調査により作成。

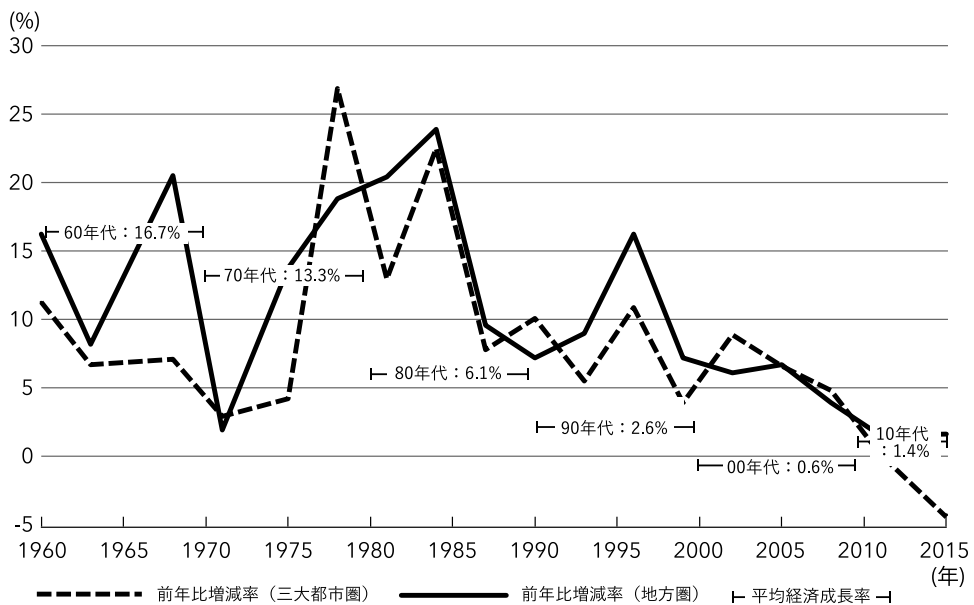


図1 博物館の増減率と経済成長率（1960年～2015年）

Ⅲ 都道府県別の立地分布と特別展の開催

1. 都道府県別の立地分布

美術館・博物館は大都市圏よりも地方圏に多く、かつ増加してきた。では地方圏ではどこでも多く存在しているのだろうか。ここでは都道府県別の分析を試みる。

表3は都道府県立および市区町村立の美術館・博物館（以下、公立美術館・博物館）

の設置状況を示している。市区町村1自治体あたりおよび県内人口100万人あたりの館数で比較すると、上位に頻出するのは、富山県、石川県、新潟県で、それに長野県、愛媛県、福井県、神奈川県が続く。下位では、山形県、鹿児島県、青森県、佐賀県に、埼玉県、香川県、京都府、奈良県、和歌山県が続く。あえて解釈すれば、公立美術館・博物館は、北陸地方でとくに多く、反対に東北や九州の一部ではごく少ないといえる。しかし、これらに対して、大都市圏では神奈川県のように公立美術館・博物館が多い県もあれば、埼玉県、京都府、奈良県のように少ない府県もあり、また地方圏でも愛媛県で多く香川県で少ないように、傾向は一様ではない。

すなわち都道府県別にみると、地方圏でも博物館の多い県とそうでない県があり、かつそこに統一的なパターンを認めることは難しい。美術館・博物館の立地分布の複雑性が垣間見られる。

また、観光対象として美術館・博物館をみる場合、その知名度や集客力は無視できない評価軸である。これに関して、日本交通公社の「観光資源台帳」は、美術館・博物館に限らず日本の主な観光資源を網羅的かつ客観的に評価してまとめている。表4は、そこから美術館・博物館を抜き出し、評価レベル別に各都道府県における該当数を示したものである。

表3 公立美術館・博物館数の設置状況（都道府県別）

| 順位 | 上位 | | | 下位 | | |
|----|-----------|--------------|------------------------|-----------|--------------|------------------------|
| | 実数 | 館数/ 市区町村数 | 県内人口 100万人 あたり館数 | 実数 | 館数/ 市区町村数 | 県内人口 100万人 あたり館数 |
| 1 | 長野県(56)* | 富山県(2.27)** | 富山県(31.89)** | 佐賀県(3)** | 山形県(0.11)** | 埼玉県(2.06)* |
| 2 | 北海道(51) | 石川県(1.37)** | 長野県(26.68)* | 山形県(4)** | 鹿児島県(0.12)** | 東京都(2.15) |
| 3 | 富山県(34)** | 広島県(0.91) | 石川県(22.53)** | 香川県(4)* | 青森県(0.13)** | 大阪府(2.38) |
| 4 | 神奈川県(30)* | 神奈川県(0.91)* | 山梨県(20.36) | 鹿児島県(5)** | 福島県(0.14) | 京都府(2.68)* |
| 5 | 愛知県(29) | 新潟県(0.87)** | 福井県(17.79)* | 青森県(5)** | 佐賀県(0.15)** | 鹿児島県(3.03)** |
| 6 | 東京都(29) | 福井県(0.82)* | 高知県(16.48) | 鳥取県(5) | 奈良県(0.15)* | 神奈川県(3.29) |
| 7 | 千葉県(28) | 愛媛県(0.80)* | 鳥根県(15.85) | 奈良県(6)* | 和歌山県(0.20)* | 福岡県(3.53) |
| 8 | 新潟県(26)** | 東京都(0.74) | 岩手県(14.06) | 和歌山県(6)* | 香川県(0.24)* | 山形県(3.56)** |
| 9 | 石川県(26)** | 岡山県(0.74) | 愛媛県(11.55)* | 京都府(7)* | 埼玉県(0.24)* | 佐賀県(3.60)** |
| 10 | 兵庫県(25) | 山口県(0.74) | 新潟県(11.28)** | 宮崎県(7) | 沖縄県(0.24) | 青森県(3.82)** |

注1：「**」および網掛けは3項目に該当、「*」は2項目に該当していることを意味する。

注2：社会教育調査および国勢調査により作成。

これをみると、「B」以上の美術館・博物館はそれ自体がごく限られており、かつ長野県を除くと大都市圏に集中している。とくに東京都は、日本全体での「B」以上に該当する44館のうち26館（59.1%）を占め、さらに「A」は全13館中4館があり、日本に2館しかない「S」も1館を有するなど、圧倒的な位置にある。

また、表4と表3を比較すると、表3で上位に頻出した諸県が表4で上位にあるとも限らず、逆に表3の下位諸県が表4でも下位であるという傾向も一概には読みとれない。つまり美術館・博物館は地域的に偏在し、かつ知名度の高い美術館・博物館も地域的に偏在しているが、それぞれの「地域」は必ずしも重なっていない。そしてこの不一致は、美術館・博物館の立地分布だけでなく、各館における展示内容の地域差によっても強調されることを、次節で示したい。

2. 特別展の開催状況

美術館・博物館の展示は、自館の所有物（コレクション）を継続的に展示する「常設展」と、他館の所有物を借用しつつ、特定のテーマに沿って一時的に展示する「特別展」に大別される。特別展は期間限定的で話題性が高く、その開催実績は、美術館・博物館の集客力を端的に示しうる。

そこで、2017年に開催された特別展の入場者数上位30の開催会場をみると（表5）、上位30のうち23が東京都で開催され、上位18位までは第2位以外すべて東京都と、「東京一極集中」の状況である。さらに、上位の特別展の展示内容をみると、アルフォンソ・ミュシャ、「国宝」、レアンドロ・エルリッヒ、運慶、草間彌生、ディズニー、ファン・ゴッホ、ボストン美術館、安藤忠雄、「茶の湯」など、世界的な知名度をもつ作家やテーマが多くみられる。

こうした大規模な展示は集客力がある一方で開催や運営のコストも高く、集客数や売上実績の目標も高くなる。さらに開催のためには資金にくわえて展示物の借用にかかる諸組織との交渉などの面で、重い負担が美術館・博物館にかかる。また同表では、同一の美術館・博物館で開催された特別展が複数含まれており、東京国立博物館と国立新美術館がそれぞれ4つ、国立西洋美術館、東京都美術館、森美術館がそれぞれ3つと、少数の施設が重複している。これは、大きな集客が期待できる大規模な特別展は、すべての美術館・博物館に実施できるわけではなく、また美術館・博物館が単体で実施することも難しいことによる。それゆえ特別展は多くの場合、新聞社やテレビ局等のマスコミとの共催という形をとるのである（表6）。

つまり東京ならどの美術館・博物館でも集客数が多いわけではない。大きな集客を得た特別展は、東京の中でも国立館を中心とした一部の著名施設にて、集中的に開催されている。

すなわち、日本最大の都市であり世界都市でもあるという東京の地域性を反映する形

表4 評価ランク別・都道府県別美術館・博物館数

①観光資源台帳「B」評価以上の美術館・博物館数

| 該当施設数 | 該当都道府県 |
|-------|---|
| 26 | 東京 (S : 1, A : 4) |
| 7 | 神奈川, 長野 |
| 5 | 京都 (S : 1), 大阪 (A : 1), 福岡 (A : 1) |
| 3 | 奈良 (A : 1), 青森, 宮城, 茨城 |
| 2 | 埼玉 (A : 1), 千葉 (A : 1), 栃木, 石川, 山梨, 静岡 |
| 1 | 鳥取 (A : 1), 岡山 (A : 1), 徳島 (A : 1), 香川 (A : 1), 北海道, 福井, 愛知, 三重, 広島, 大分 |
| 0 | 岩手県, 秋田県, 山形県, 福島県, 群馬県, 新潟県, 富山県, 岐阜県, 滋賀県, 兵庫県, 和歌山県, 鳥取県, 山口県, 愛媛県, 高知県, 佐賀県, 長崎県, 熊本県, 宮崎県, 沖縄県 |

②観光資源ランクの定義

| 観光資源ランク | 定義 |
|---------------|--|
| S 特A級資源 | わが国を代表する資源であり、世界に誇示しうるもの。日本人の誇り、日本のアイデンティティを強く示すもの。人生のうちで一度は訪れたいもの。 |
| A A級資源 | 特A級に準じ、わが国を代表する資源であり、日本人の誇り、日本のアイデンティティを示すもの。人生のうちで一度は訪れたいもの。 |
| B 特別地域観光資源 | その都道府県や市町村を代表する資源であり、その土地のアイデンティティを示すもの。その土地を訪れた際にはぜひ立ち寄りたいたいもの。また、その土地に住んでいる方であれば一度は訪れたいもの。 |

注1：観光資源台帳により作成。

注2：観光資源台帳の種別名称が「博物館・美術館」に該当する施設のうち、大日本印刷社の「ミュージアムデータベース」に記載のない数軒（沖縄平和公園など）は含まない。

表5 2017年に開催された特別展の会場と入場者数

| 展覧会名 | 会場 | | | 会期 日数 | 入場者数 | | 1日あたり 入場者数 | |
|-------------------|---------------|--------|-----|----------|---------|----|---------------|----|
| | 名称 | 種類 | 所在地 | | 実数 | 順位 | 実数 | 順位 |
| ミュシャ展 | 国立新美術館 | 国立 | 東京 | 79 | 657,350 | 1 | 8,321 | 4 |
| 特別展覧会「国宝」 | 京都国立博物館 | 国立 | 京都 | 48 | 624,493 | 2 | 13,010 | 1 |
| 特別展「深海2017」 | 国立科学博物館 | 国立 | 東京 | 79 | 617,062 | 3 | 7,811 | 5 |
| レアンドロ・エルリッヒ展 | 森美術館 | 私立 | 東京 | 135 | 614,411 | 4 | 4,551 | 14 |
| 興福寺中金堂再建記念特別展「運慶」 | 東京国立博物館 | 国立 | 東京 | 55 | 600,439 | 5 | 10,917 | 3 |
| 草間彌生 わが永遠の魂 | 国立新美術館 | 国立 | 東京 | 80 | 518,893 | 6 | 6,486 | 8 |
| ディズニー・アート展 | 日本科学未来館 | 国立 | 東京 | 153 | 473,903 | 7 | 3,097 | 23 |
| 「怖い絵」展 | 上野の森美術館 | 私立 | 東京 | 72 | 414,006 | 8 | 5,750 | 9 |
| ブリュゲル「バベルの塔」展 | 東京都美術館 | 公立 | 東京 | 67 | 379,527 | 9 | 5,665 | 10 |
| ゴッホ展 巡りゆく日本の夢 | 東京都美術館 | 公立 | 東京 | 66 | 370,031 | 10 | 5,607 | 11 |
| アルチンボルド展 | 国立西洋美術館 | 国立 | 東京 | 86 | 365,562 | 11 | 4,251 | 17 |
| 北斎とジャポニスム | 国立西洋美術館 | 国立 | 東京 | 82 | 364,149 | 12 | 4,441 | 15 |
| サンシャワー | 国立新美術館, 森美術館 | 国立, 私立 | 東京 | 111 | 354,245 | 13 | 3,191 | 22 |
| 大英自然史博物館展 | 国立科学博物館 | 国立 | 東京 | 78 | 327,579 | 14 | 4,200 | 18 |
| 仁和寺と御室派のみほとけ | 東京国立博物館 | 国立 | 東京 | 48 | 324,042 | 15 | 6,751 | 6 |
| ボストン美術館の至宝展 | 東京都美術館 | 公立 | 東京 | 72 | 313,131 | 16 | 4,349 | 16 |
| 安藤忠雄展 | 国立新美術館 | 国立 | 東京 | 72 | 300,102 | 17 | 4,168 | 19 |
| N・S・ハルシヤ展 | 森美術館 | 私立 | 東京 | 128 | 300,043 | 18 | 2,344 | 27 |
| ブリュゲル「バベルの塔」展 | 国立国際美術館 | 国立 | 大阪 | 80 | 278,723 | 19 | 3,484 | 20 |
| 「怖い絵」展 | 兵庫県立美術館 | 公立 | 兵庫 | 51 | 271,689 | 20 | 5,327 | 12 |
| 北斎 一富士を越えて一 | あべのハルカス美術館 | 私立 | 大阪 | 40 | 266,118 | 21 | 6,653 | 7 |
| ヨコハマトリエンナーレ2017 | 横浜美術館など3会場 | 公立など | 神奈川 | 88 | 259,032 | 22 | 2,944 | 24 |
| 茶の湯 | 東京国立博物館 | 国立 | 東京 | 49 | 245,795 | 23 | 5,016 | 13 |
| スケーエン：デンマークの芸術家村 | 国立西洋美術館 | 国立 | 東京 | 95 | 219,150 | 24 | 2,307 | 28 |
| 第69回 正倉院展 | 奈良国立博物館 | 国立 | 奈良 | 17 | 217,053 | 25 | 12,768 | 2 |
| 大エルミタージュ美術館展 | 森アーツセンターギャラリー | 私立 | 東京 | 92 | 201,494 | 26 | 2,190 | 29 |
| ジブリの大博覧会 | 大分県立美術館 | 公立 | 大分 | 59 | 194,567 | 27 | 3,298 | 21 |
| レオナルド×ミケランジェロ展 | 三菱一号館美術館 | 私立 | 東京 | 88 | 182,480 | 28 | 2,074 | 30 |
| 古代ギリシャ 一時空を超えた旅一 | 東京国立博物館 | 国立 | 東京 | 80 | 199,567 | 29 | 2,495 | 26 |
| THEドラえもん展 | 森アーツセンターギャラリー | 私立 | 東京 | 69 | 182,014 | 30 | 2,681 | 25 |

注：Art Annual onlineにより作成。

表6 2017年に開催された特別展来場者数上位30の主催者

| 展覧会名 | 会場 | 所在地 | 主催者（開催施設除く） |
|--------------------|---------------|-----|--|
| ミュシャ展 | 国立新美術館 | 東京 | ブラハ市、ブラハ市立美術館、NHK、NHKプロモーション、朝日新聞社 |
| 特別展覧会「国宝」 | 京都国立博物館 | 京都 | 毎日新聞社NHK京都放送局、NHKプラネット近畿 |
| 特別展「深海2017」 | 国立科学博物館 | 東京 | 海洋研究開発機構、NHK、NHKプロモーション、読売新聞社 |
| レアンドロ・エルリッヒ展 | 森美術館 | 東京 | |
| 興福寺中金堂再建記念特別展「運慶」 | 東京国立博物館 | 東京 | 法相寺大本山興福寺、朝日新聞社、テレビ朝日 |
| 草間彌生 わが永遠の魂 | 国立新美術館 | 東京 | 朝日新聞社、テレビ朝日 |
| ディズニー・アート展 | 日本科学未来館 | 東京 | 日本テレビ放送網、読売新聞社、WOWOW |
| 「怖い絵」展 | 上野の森美術館 | 東京 | 産経新聞社、フジテレビジョン |
| ブリュッゲル「バベルの塔」展 | 東京都美術館 | 東京 | 朝日新聞社、TBS、BS朝日 |
| ゴッホ展 巡りゆく日本の夢 | 東京都美術館 | 東京 | NHK、NHKプロモーション |
| アルチンボルド展 | 国立西洋美術館 | 東京 | NHK、NHKプロモーション、朝日新聞社 |
| 北斎とジャポニスム | 国立西洋美術館 | 東京 | 読売新聞社、日本テレビ放送網、BS日テレ |
| サンシャワー：東南アジアの現代美術展 | 国立新美術館、森美術館 | 東京 | 国際交流基金アジアセンター |
| 大英自然史博物館展 | 国立科学博物館 | 東京 | 読売新聞社、BS日テレ |
| 仁和寺と御室派のみほとけ | 東京国立博物館 | 東京 | 真言宗御室派総本山仁和寺、読売新聞社 |
| ボストン美術館の至宝展 | 東京都美術館 | 東京 | 朝日新聞社、朝日放送、BS朝日 |
| 安藤忠雄展 | 国立新美術館 | 東京 | TBS、朝日新聞社 |
| N・S・ハルシヤ展 | 森美術館 | 東京 | |
| ブリュッゲル「バベルの塔」展 | 国立国際美術館 | 大阪 | 朝日新聞社、朝日放送、BS朝日 |
| 「怖い絵」展 | 兵庫県立美術館 | 兵庫 | 産経新聞社、関西テレビ放送、神戸新聞社 |
| 北斎 一富士を越えて一 | あべのハルカス美術館 | 大阪 | NHK大阪放送局、NHKプラネット近畿、朝日新聞社 |
| ヨコハマトリエンナーレ2017 | 横浜美術館など3会場 | 神奈川 | 横浜市、横浜市芸術文化振興財団、NHK、朝日新聞社、横浜トリエンナーレ組織委員会 |
| 茶の湯 | 東京国立博物館 | 東京 | NHK、NHKプロモーション、毎日新聞社 |
| スケーエン：デンマークの芸術家村 | 国立西洋美術館 | 東京 | スケーエン美術館、東京新聞 |
| 第69回 正倉院展 | 奈良国立博物館 | 奈良 | |
| 大エルミタージュ美術館展 | 森アーツセンターギャラリー | 東京 | エルミタージュ美術館、日本テレビ放送網、読売新聞社、BS日テレ |
| ジブリの大博覧会 | 大分県立美術館 | 大分 | ジブリの大博覧会大分実行委員会、大分合同新聞社、TOSテレビ大分、公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団 |
| レオナルド×ミケランジェロ展 | 三菱一号館美術館 | 東京 | 日本経済新聞社 |
| 古代ギリシャ 一時空を超えた旅— | 東京国立博物館 | 東京 | ギリシャ共和国文化・スポーツ省、朝日新聞社、NHK、NHKプロモーション |
| THEドラえもん展 | 森アーツセンターギャラリー | 東京 | テレビ朝日、朝日新聞社、ADK、小学館、シンエイ動画、小学館集英社プロダクション、乃村工藝社 |

注：Art Annual onlineにより作成。

で、東京では世界的な知名度を持つ特別展が、一部の著名施設を中心に開催されている。その背後には、これらの美術館・博物館が東京という場所に立地することで、多大な開催コストに見合うだけの集客を得やすく、かつ展示の企画にあたって必要となる在京マスコミ等の諸主体との密接な協力が都市内部で遂行しやすいという、経済的に優位な立地条件がある。

ただし表5、6には、東京以外で開催された特別展も含まれている。会場は京都や大阪、神奈川、奈良などのほか、地方圏でも大分の例がみられる。そしてこれらの展示でも主催者には、NHK京都放送局や神戸新聞社、横浜市芸術文化振興財団、大分合同新聞社といった、地域のマスコミや組織がみられる。つまり東京以外でも、こうしたローカルな関係主体との緊密な連携を可能にする地域に立地する、一部の美術館・博物館の特別展に人気が集まる傾向が認められる。

IV 結論

美術館・博物館の全国的な立地分布は、以下のような基本的動向を示す。

①美術館・博物館は三大都市圏よりも地方圏に多く、地方圏では高度経済成長期と1980年代に増加したが、三大都市圏では増加率が相対的に小さく、近年は館数が減少している。

②しかし都道府県別にみると、美術館・博物館は地方圏ならどこでも多いわけでもなく、特定の地域で多い(少ない)わけでもない。さらに、観光対象として強い集客力を持つ美術館・博物館は、単純に館数の多い県にみられるともいえない。

③こうした中で東京には知名度の高い美術館・博物館が特に多く存在し、こうした一部の著名施設では世界的な知名度をもつ特別展が開催され、集客実績の顕著な集中が認められる。そしてそれは東京における、巨大人口や都市インフラ、マスコミの集積といった、世界都市としての地域性の反映とみることでもできる。ただし、東京以外でも一部の地域や美術館・博物館において、大きな集客実績が得られている。

④このように美術館・博物館は地域的に偏在している。しかし美術館・博物館それ自体の地域的偏在と、「集客力のある美術館・博物館」の地域的偏在がそれぞれ存在し、かつ両者が偏在する「地域」は同一の空間ではない。芸術鑑賞機会には地域差があり、かつそれは質的にも量的にも複雑であることが示された。

本稿の意義は、美術館・博物館を観光対象として捉え、全国的な立地分布の基本的動向を把握したことによって、「芸術鑑賞機会の地域差」という新たな論点を析出した点にある。この成果をふまえると、以下のような新たな課題が挙げられる。

まず、分析単位の精緻化である。本稿では地方圏と三大都市圏や都道府県別など、比較的広域な空間スケールにおける立地分布を把握したが、今後は施設を単位として、地

域内部でのローカルな立地分布の分析が期待される。ここでは美術館・博物館だけでなく、ギャラリーなども含めて分析できるデータベースの構築が必要である。また本稿で部分的にふれた特別展について、その開催状況の空間的パターンを把握することも、芸術鑑賞機会の検討という意味で今後求められよう。

第二には、美術館・博物館やギャラリーにおける芸術鑑賞機会は、地域においていかに生み出され、維持されるのか、そこにはいかなる地域差があるのかという問題である。美術館・博物館が多い地域では、なぜ、いかにして多くなったのだろうか。魅力的な特別展は東京や地方で、それぞれいかに生み出されるのだろうか。この問題には、個々の地域の歴史、教育文化政策、地域経済構造などをふまえてローカルな状況を総合的に把握し、地域間で比較しながら検討する、地理学的な視点が貢献できる。そして本稿はその分析基礎を提供している。

いずれにせよ、芸術鑑賞機会には地域差があり、芸術をより容易かつ大量に鑑賞できる地域と、そうでない地域がある。ではこのような地域差は、「地域格差」として把握することができるのだろうか、あるいはするべきなのであろうか。芸術作品は本来、それぞれの客観的価値を統一基準のもとで比較することが難しい。この原則に基づけば、例えば、仮に地方では東京のように世界的な知名度を持つ作品を容易に鑑賞しにくいとしても、東京では、地方のその地域でしか鑑賞できない作品を容易には鑑賞できないため、地方と東京で芸術鑑賞機会に地域差はあるが、それを格差とはいえない。

しかし今日では、芸術鑑賞機会はクリエイティブ・クラスや知識労働者の集積と成長を促進する先進国大都市の有力なアメニティのひとつとして位置づけられている。地域において、もはや芸術は芸術のみとして単独で存在しえず、社会的にも政治的にも、そして経済的にも関係づけられた存在であり、ときに地域経済や都市社会の趨勢そのものを左右しうる要素としてみなされている。こうした文脈のもとでは、芸術鑑賞機会の地域差を地域格差として位置づける視点が必要なのかもしれない。この問題には、芸術鑑賞機会を観光サービスという商品として位置づけ、その生産と消費を空間的に説明する、経済地理学と観光地理学を止揚した議論が必要となろう。